

ポプラ社版／世界の名著 27

宝

島

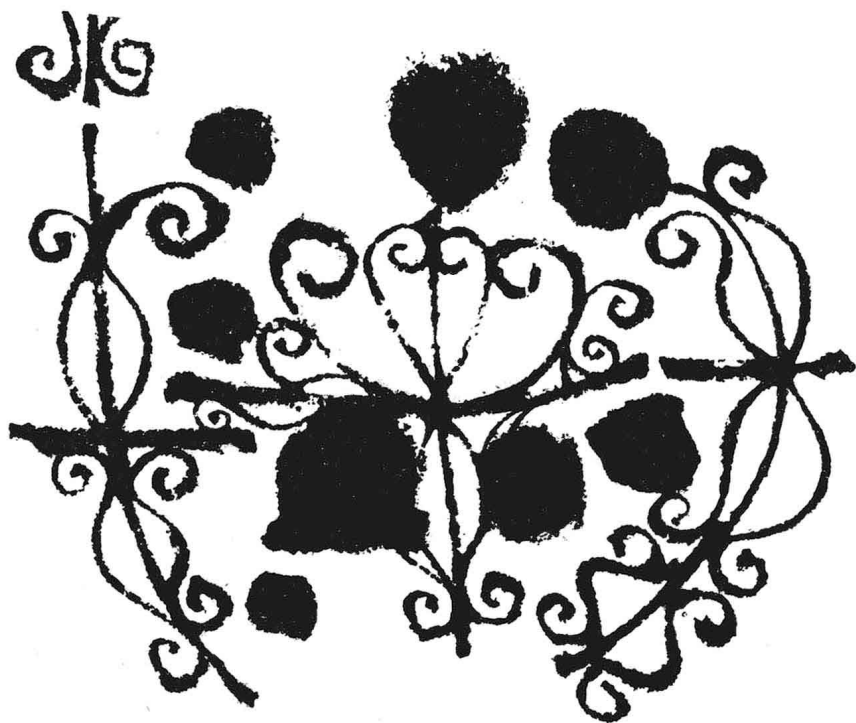
ロバート＝スチブンソン 飯島淳秀訳

ポプラ社版／世界の名著

宝

島

ロバート＝スチブンソン 飯島淳秀訳



編集委員

藤田圭雄 児童文学者
 金田一春彦 東京外国語大学教授・文庫
 神宮輝夫 児童文学者

世界の名著・27

定価 980 円

宝島

著者・ロバート・R・スチブソン

訳者・飯島淳秀 いじまよしひで

発行・昭和44年1月30日 第1刷 ©

昭和60年2月28日 第16刷

発行者・田中治夫

発行所・株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 報警東京4-149271番

印刷・新興印刷製本株式会社

製本・大成紙工業所

(落丁・乱丁本はいつでもお取り替えいたします)



もくじ

第一部 老海賊

第一章 〈ベンボー提督屋〉にきた老海賊……………7

第二章 〈黒犬〉あらわれ、きえさる……………16

第三章 黒ボチ……………26

第四章 水夫の衣類箱……………36

第五章 めくらの男の最後……………44

第六章 船長の書類……………53

第二部 船のコック

第七章 ブリストルへいく……………63

第八章 〈遠めがね屋〉の看板の店で……………71



第九章	火薬と武器	81
-----	-------	----

第一〇章	航海	90
------	----	----

第十一章	リンゴだるの中で聞いた話	99
------	--------------	----

第十二章	戦いの会議	110
------	-------	-----

第三部 ぼくの陸上の冒険

第十三章	陸上の冒険の始まり	121
------	-----------	-----

第十四章	第一撃	129
------	-----	-----

第十五章	島の男	137
------	-----	-----

第四部 とりで

第十六章	先生による話のつづき	
------	------------	--

	どうして船を見すてたか	148
--	-------------	-----

第十七章	先生による話のつづき	
------	------------	--

	ボートの最後の航海	155
--	-----------	-----

第十八章	先生による話のつづき	
------	------------	--

	第一日の戦いおわる	162
--	-----------	-----



第一章 ふたたびジム・ホーキンスの筆に

なる話——とりでの守備隊

第二章 シルバーの役目

第三章 攻撃

第五部 ぼくの海の冒険

第二章 どうして海の冒険を始めたか

第三章 はげしい引き潮

第四章 皮ボートの航海

第五章 海賊旗をおろす

第六章 イズレイル・ハンズ

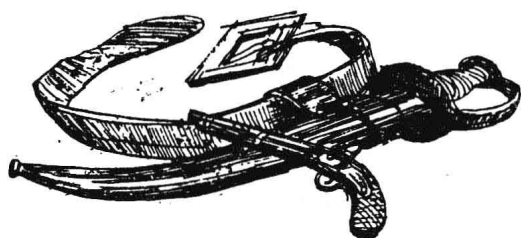
第七章 エイト銀貨

第六部 シルバー船長

第八章 敵の陣営で

第九章 またも黒ボチ

第十章 仮釈放



第三章	宝さがし——フリントの指標 たから しるし	287
第三章	宝さがし——しげみの中の声 たから しるし	297
第三章	首領の没落 しゅりやう ぼつちやく	306
第三章	そして、ついに	315
解 説		324

装てい 難波 淳 郎
 箱・口 絵
 さし 絵 岩井 泰三

宝

島

飯^い ロバ
島^{じま} ート
淳^{じゅん} ス
秀^{ひで} ブ
訳^{わけ} ソン

TREASURE ISLAND (1883)

Robert Louis Stevenson

第一部 老海賊

第一章 へベンボー提督屋にきた老海賊

地主のト・ローニさん、医者のリブシー先生、そのほかのみんなが、宝島のことを、はじめからおわりまでくわしく、ただし、宝はまだすっかり掘り出してないから、島の位置だけはかくして、それ以外のことはくわしく、ぼくが書きとめておくようにといわれるので、一七——年に、これを書き始めた。

だが、話はぼくの父がへベンボー提督屋という宿屋をやっている、その宿屋に、日焼けした、刀きずのある、年とった水夫がやってきてとまることになった、あの最初のころにさかのぼる。

ぼくは、まるできのうのことにようにおぼえている。その男は、水夫の衣類箱を手押し車にのせてうしろからはこぼせながら、宿屋の戸口まで、てくてくとやってきた。背は高く、強そうで、おもおもしろく、くり色の髪をした男だった。かれのタールでよかれた弁髪は、きたならしい青い上着の両肩にたれかかっていた。手はこつこつして、きずあとだらけで、つめはまっ黒で、われていた。かた一方のほおには刀きずのあとがあり、それが、あかでよかれて、へんになまっちょろい色をしていた。いまでも、ぼくははつきりと思い出すが、そいつが入り江を見わたしながら口笛を吹いていたと思うと、急にあの古い船乗りの歌をうたい出した。あ

とになって、かれがよくうたっていた歌だ。

(2) 十五人のやつらは、死人の箱の上――

ヨー・ホー・ホー、それにラム酒が一本だ！

そのかん高い、年よりの、たどたどしい声は、いかりを巻き上げるろくろをぐるぐるまわすのに合わせてうたっているうちに、つぶれてしまったらしいのだ。やがて、その男は持っていた巻きろくろの棒みたいな棒きれでドアをたたいた。ぼくの父が出ていくと、まるでどなりつけるように、ラム酒を一杯持っていといた。ラム酒を持っていくと、かれは酒の味みでもするように、舌で味をためしながら、ちびちびとめるように飲んだ。それから、あたりの断崖をながめたり、うちの宿屋の看板を見あげたりした。

「こいつは、おあつれえむきの入り江だな。」と、その男はついに口をきいた。「おまけに、この飲み屋の位置もいいところがあるな。客は多いのか、おやじ？」

父は、いいえ、情けないけど客はほとんどありませんと答えた。

「なるほど、そうか。」

かれはいった。

「こいつは、おれにびつたりのおねぐらだぜ。おい、こら。」と、かれは手押し車をごろごろ押してきた場に向かって、どなった。

「ここに車をつけて、おれの箱を上にあげる手つたいをしろ。おれはしばらくここにとまるからな。」と、かれはつづけた。

「おれは手のかからねえ男だ。ラム酒と、ペーコンと目玉焼きがありゃ、ほかはなんにもいらねえ。それと、船の見張りをするのにあつれえむきの、あそこあの岬があるだけでたくさんだぜ。なに、おれをなんと呼ばばいいかつて？ 船長と呼べばいいぜ。おお、そうか、なるほど——そら、これだ。」

そういつて、かれは三、四枚の金貨を戸口にほうり出した。

「そいつがなくなったら、おれにそういえばいいぜ。」と、かれは司令官みたいなこわい顔をしていった。

たしかにその男は、服はきたないし、口のききかたなんかも乱暴だったが、ようすから見ると、ただの水夫ではなかった。いつも人に命令したり、人をなぐりつけたりしつけている副船長が、船長らしいところがあった。

手押し車を押してきた男の話によると、その朝、かれは駅馬車でやってきて、ヘロイヤル・ジョーシ屋で馬車をおりと、この海岸にはどんな宿屋があるかときいたというのだ。そして、ぼくのうちの宿屋が評判がいいと聞いたのだろう。それに一軒だけぼつんとはなれて建っているといわれて、ほかの宿屋をやめて、ぼくのところを宿に選んだのだった。この客のことで、ぼくたちにわかったのはそれだけだった。

かれはいつもひどく無口だった。一日じゅう、真鍮の望遠鏡を持って、入り江のまわりや、断崖の上をうろつきまわっていた。晩になると、応接室の暖炉のそばのすみっこにすわりこんだきりで、水割りの、おそろしく強いラム酒を飲んでいた。人から話しかけられても、たいていは口をきかず、ふいにおそろしい目つきで見あげるだけで、まるで霧笛みたいなすごい音をたてて、ふうっと鼻息をたてるだけだった。だから、ぼくのうちの者も、うちにやってくる人たちも、かれをほっておくのがいいのだとわかった。

毎日、かれは外をふらついてから帰ってくると、だれか船乗りが道を通っていかなかったか、ときいた。



はじめのうち、ぼくたちは、かれがこんなことをいつもきくのは、きつとおなじ船乗り仲間の友だちがほしいからなのだろうと思っていた。

ところが、そうではなくて、船乗りをさけたがっているのだということが、だんだんわかってきた。船乗りが「ベンボー提督屋」にとまったりすると、(ときどき、海岸の道づたいにブリストルへいく船乗りが、とまることがあった) かれはカーテンのかかっている戸口から、そつと船乗りのようすをのぞいて、それから応接室にはいりこんできた。しかも、そんな客がいるときはいつも、まるでネズミみたいに声一つたてなかった。このことは、少なくともぼくにだけは、なぞでもなんでもなかった。というのは、ある意味では、ぼくもかれといっしょになって警戒していたからだ。いつだったか、かれはぼくをこっそり呼びよせた。そして、もしぼくが「一本足の船乗り」を油断なく見張っていて、そいつのすがたが見えたらすぐに教えてくれさえすれば、毎月一日に四ペニー銀貨を一枚くれると約束したのだ。

ところが、毎月一日になって、ぼくがそのおだちんをくださいというとき、かれはふうんとすごい鼻息をぼくに吹っかけて、にらみつけるだけのことがたびたびだった。それでも、一週間とたたないうちに、かれは

かならず思いなおし、四ペニー銀貨ぎんがをくると、〈一本足の船乗りふたのふねのり〉を見張みはっているよという命令めいれいをくりかえすのだった。

その人物じんぶつのために、ぼくがどんなに夢ゆめでうなされたか、いうまでもなからう。あらしの夜、風が家全体ぜんたいをゆさぶり、入り江や断崖だんがいに波がごうごうとどろきわたるときなど、そいつがいろんなすがたをし、いろんな悪魔あくまのようにおそろしい顔をして見えてくるのだった。一本足が、ひざのところで切られているかと思えば、もものつけ根ねのところで、ぼっそり切られていた。

そうかと思うと、一本の足しかない、それも胴どうのまん中に一本しかない化け物ものだったりした。そいつが、生け垣いけがきや、みぞをびよんびよんとびこえて、走って、ぼくを追いかけてくる夢を見るのが、なによりもいちばんこわかった。こんなおそろしいまぼろしに追いまわされて、毎月たったの四ペニー銀貨ぎんが一枚もらうのは、ずいぶん割わりに合わない話だった。

でも、この一本足の船乗りは考えるだけでもこわかったが、船長せんちょうその人のことは、かれを知っているほかのだれよりも、ぼくにはこわくなかった。かれは、もう頭がもたないだろうと思うくらいにラム酒ラムしゅを飲んだりする晩ばんがあった。そんなとき、かれはいすにどつかとすわりこんで、まわりにいる人などには目もくれず、気味きみのわるい、乱暴らんぼうな古い船乗りふたのふねのりの歌をうたった。

かと思うと、まわりの者に酒をおごり、ぶるぶるふるえているみんなに、むりやりに自分の話を聞かせたり、自分の歌に合わせて合唱がっしやうをさせたりした。何度なんども、ぼくは、家がびりびり鳴りひびくほど、「ヨー・ホー・ホー、それにラム酒ラムしゅが一本だ」と合唱がっしやうするのを聞いたものだ。そばにいる人たちはみんな、殺されやしないかと思って、いっしょうけんめいに合唱がっしやうにくわわった。自をつけられたらたいへんだと、みんな人より

うんと大きな声を出していた。というのも、かれがこんなぐあいに興奮こうふんしたすと、こんな人間にんげんはいないと思えるほど、むちゃくちゃにいばりちらかすからだ。突然とつぜんテーブルをひっぱたいて、みんなをだまらせる。なにか質問しつもんすると、いきなりかんしゃくを起こし、まっ赤かになっておこりだす。かと思うと、なにも質問しつもんしなればしないでおこりだす。そして、みんな、おれの話をよく聞いてなかったな、ときめつけるのだ。自分が酔よいつぶれて眠ねむくなり、よろよろしながらベッドにいくまで、だれひとり宿屋やどやから出ていくのを許ゆるそうとしなかった。

かれの話は、なによりもみんなをふるえあがらせた。おそろしい話ばかりだった。しばらく首の話、船べりからつき出した板の上を、目かくして歩かせて海に落として殺す話。大しけの話、ドライートーテュガスの話、スペイン航路こうろで起きた野蛮やばんな事件じけんとか、その土地の話などだった。

かれの話によると、神さまもあきれかえるほどの海の極悪人ごくあくにんたちの中にまじって、かれは暮らしてきたにちがいがなかった。そういう話を語るときのことばづかいときたら、説明せつめいして聞かせてくれるどんな犯罪はんざいにもおとらぬくらいに、おとなしいなかの人たちをぞっとふるえあがらせた。ぼくの父はいつもいっていた。こんなありさまじゃ、この宿屋やどやもつぶれてしまふだろう。むやみ、といじめつけられ、頭からどやしつけられて、そのあげく、ふるふるふるえながら寝床ねどにつくようじゃ、そのうち、みんななくなるにきまっているから、というのだった。

だが、ぼくは、かれがいてくれたことが、かえってよかったのだと、心から信じている。なるほど、そのときは、みんなはびくびくしていたが、あとからふりかえってみると、むしろおもしろがっていたのだ。静かないなかの生活せいかつには、けっこういい刺激しげきだった。若者わかものたちの中には、かれを崇拜すうはいするという連中れんちゆうまでいて、

かれこそへほんとうの船乗りだとか、へほんとうの海の古つわものだとか、そんな呼び名でほめたたえていた。ああいう船乗りがいるからこそ、イギリスという名を聞いただけで、世界の海をふるえあがらせているのだと、いつていた。

たしかに、かれはぼくのうちの商売をつぶしてしまひそうだった。かれがとまってから一週たち、二週たち、それどころか、しまひには一月、二月、三月と過ぎていった。そのため、かれがわたしたちのお金はもうとつきのむかしに使いはたしていた。

それでも、ぼくの父は宿賃をはらってくれるようにといひだす勇氣がなかった。ちよつとでも宿賃のこゝろを持ち出そうものなら、船長はふうんと、ものすごく大きな音をたてて鼻息を吹き、父をにらみつけて、部屋から追い出してしまった。

そんなふうにはねつけられたあと、父は両手をもみしぼって、どうしようかと弱りこんでいた。そんな心配と恐怖の中で暮らしていたために、父はいのちをちぢめ、不幸な死に方をする羽目になったにちがいない。船長は、ぼくの家にとまっていたあいだ、服は一度も着変えたこともなく、ただ、行商人からくつ下を二・三足買ったただけだった。帽子のへりも一か所、だらりとたれさがってしまったが、風が吹くとずいぶんじやまだだったのに、かれはそのままかまわずにいた。上着など、ひどいものだった。かれは、二階の自分の部屋で、破れた上着のつぎをあてていた。しまひには、つぎだらけになってしまった。手紙も書いたことはなく、受け取ることもなかった。口をきくのも土地の近所の人たちだけだった。それも、たいていは、ラム酒を飲んで酔っぱらったときだけだった。かれが持ってきた大きな水夫の衣類箱があけられるのを、ぼくたちのだれも見ることがなかった。

かれは、たった一度だけ、やりこめられたことがある。それはもうおわりに近いところで、ぼくの父が、いのちの病氣にかかって、ずいぶん重くなっていたときのことだ。ある日の午後おそく、リブシー先生が病人を見にきて、母が出してあげた夕食を食べながら、先生の馬が村からむかえにくるまで一服しようと、応接室にはいった。古ぼけたヘンボ―提督屋には、馬小屋がなかったのだ。

ぼくも先生のあとについて応接室にはいった。雪のようなまっ白な髪粉をつけ、よく光るまっ黒な目をして、行儀のいい、身なりもきちんとした快活な先生。それにくらべて、だらしのないな者たち、とりわけ、きたならしい、鈍重な、どんよりとにごった目をした、かかしみたいなあの海賊とは、なんというちがいだろうかと感じたことを、ぼくは、いまでもはっきしておぼえている。

海賊はラム酒に酔いつぶれ、だらしなくテーブルにもたれかかっていた。ふいに、かれは——船長のことだが——いつもの歌を、声をはりあげてやりだした。

十五人のやつらは、死人の箱の上——

ヨ―・ホ―・ホ―、それにラム酒が一本だ！

飲めよ、残りのやつらは悪魔がかたづけ

ヨ―・ホ―・ホ―、それにラム酒が一本だ！

はじめのうち、へ死人の箱」というのは、~~船の~~裏側のかれの部屋にある、あの大きな箱のことだと、ぼくは思っていた。だから、それと、あの一足船乗りのこととがいつしよになって、おそろしい夢になされたものだった。